



「笹川杯作文コンクール 2011」～中国語で応募～ 第6回優秀賞作品

「先生がくださった二冊」

北京市 盧学麗

私の机の上には2冊の本が置いてある。1冊は稲森和夫の『働き方』で、もう1冊は呉曉波の『大敗局』である。

どちらも、私が私の指導教師から頂いたものである。私が幸運にも大学院生として張先生について間もなく、私は先生から最初の本『働き方』を頂いた。先生は50歳で、母親のような慈悲と優しさで私達全ての学生に気を遣ってくださる方である。先生は、私が農村の恵まれない家庭出身であることも、省都所在のある普通大学から中国政法大学に入学したため、基礎がそれほどしっかりしていないということもご存じである。先生は、新しい環境に入ったばかりで落ち着かない私の心情を見抜き、私をご自宅に招いて斬新な図書『働き方』を手渡してくださった。「私は、法大に来たばかりのあなたの気持ちとプレッシャーを理解できますよ。プレッシャーに打ち勝つには、努力をなさい。稲森和夫さんの精神を学ぶといいでしょう。きっと何ごともしっかりできるようになります」と心のこもった言葉を添えて…。私は懸命に頷いた。

その夜、私は、電気スタンドの下で稲盛和夫氏の精神を初めて感じ、日本人の仕事の態度を悟った。稲森氏は大学で有機化学を専攻していたが、幾つかの理由により最終的には有機化学の分野に進まなかった。彼は、未知の専門分野と業務環境に対して気落ちしたり尻込みしたりすることはなかったし、会社が破産して彼しか残らなかった時でさえ、仕事を離れることはなかった。彼は仕事を愛することに努め、自分の子供を抱くかのように実験材料を抱えて寝たことさえあった。そうした情熱と安定した心を持っていなければならぬ、基礎から始めた彼が、会社を最終的に世界500強企業に押し上げることはなかっただろう。

稲森氏は、次のように語っている。「熱愛中の恋人は、傍目には呆然としそうなことがあっても、落ち着いて対処する。仕事も同じであって、夢中になって、心から愛してこそ、苦しい仕事でも長く続けることができる。こうした姿勢を貫けば、恨みも後悔もすることはない。」「自分で仕事をし、仕事は自分でするという境地に達してこそ、全身全霊で仕事に打ち込める。」と。彼は自らを“自己発火型”人間に育て上げる努力をしたのである。事業を成就させるためには、自ら燃えることのできる人にならなければならないからである。仕事を心から愛して自分の火種とし、自分の情熱を全ての人や物にまで浸透させるのである。

私は、彼の精神に深く震撼した。日本人は昔から、落ち着いていて、厳格で、目標が明確であるということでは有名だが、日本人の優れた特質をここまで一身に集めた人は珍しい。こうしたことは、まず起こりえないことであるが、稲森氏には起きたのである。日本は小さいが、その意欲と戦闘力は決して弱くない。それは、日本が自分の弱みを明確に理解しているため、全力を尽くしてほぼ完璧に自らの忍耐力を示し、最終的にある精神を日本人から引き出し、こうした戦闘力を日本の至るところに広げてきたからである。

指導教師は、研究の第二学期に二冊目の本『大敗局』を私に下さった。驕らず、焦らず、小さな成果に心を奪われないようにすること、さもなければ、即、敗北へ突き進むことになるとの教えだった。この本も、私の最愛の書の一つである。『大敗局』の三文字は、驕らず高慢にならぬよう、いつも私に警鐘を鳴らしてくれる。呉曉波氏の『大敗局』は、改革開放の数年来、中国の一部民営企業が苦境の中でどのように苦闘しながら成長し、遂には一時的な輝きを得たが、それでも劣勢を脱することができなかった有様を記録したものである。その中の原因には深く考えさせられるものがある。浮き足だったり、巧妙に立ち回ったりすることを避け、物質的な誘惑と畏を回避しなければならないということである。勿論、偉大なる環境との関係をより良くする必要もある。全ての要素が調和した時、私達は成功から遠くない位置にいるはずだ。

巨人集団（上海巨人網絡科技有限公司）、秦池酒、三株口服液…全ての輝きが黄ばんだ写真に納まっている。あの時代の若者には勇氣、戦闘力、燃焼力があつたし、創業に歩み出す時の落ち着きと、一歩ずつ進む戦略があつた。しかし、成功と失敗は一夜のうちに決まってしまう。私達は“野蛮な生長”をしてきた。“大敗局”は、決して決定的な状態ではない。私達は今でも前に進んでいるのだから。

私の机の上にある二冊には、東洋人の知恵と生命力が詰まっている。私は、『働き方』により日本を少し理解することができた。日本人は不屈の民族であり、その忍耐力と戦闘力が依然として強大であるということを知ったのである。日本は地震、津波、放射性物質の漏出など大小様々な災難を経験したが、日本人の精神はこうした困難に打ち勝ち、その精神をより輝かせ、伝承し続けていくと、私は信じている。こうした初歩的な認識の中で、個人的に恥ずかしさと悟りを覚えたこともある。新たな時代の若者として、私達は、些細な事でも勇気と活力をもって一つ一つ着実に片づけていってこそ、私たちの才能は成功への道をゆっくりと歩めるということである。『大敗局』は、吸収することのできる一種の教訓を私に与えてくれたのだが、この教訓は生涯に亘って私の役に立つことだろう。おかげで遠回りを減らすことができるのだから。